

土木図書館所蔵・眞田秀吉旧蔵資料の公開に向けた課題

東京都土木技術センター

正会員 ○岩屋隆夫

(社) 土木学会附属土木図書館

正会員 坂本真至

土木学会附属土木図書館には、貴重な土木資料が多数ある。その一つが眞田秀吉旧蔵資料である。当該資料は、2004(平成16)年に図書館が土木振興基金の助成を受け一括して古書店から購入したもので、眞田秀吉本人所蔵の延べ189項目を数える資料である。筆者は土木学会図書館委員会の一員として、当該資料の整理に係わって来たので、ここでは資料の紹介と公開に向けた課題を述べることにする。

1. 眞田秀吉の略歴

眞田秀吉は、土木の世界にあって余りにも有名な人物であるが、冒頭に彼の略歴を紹介しておく。

眞田秀吉は1873(明治6)年広島で生まれ、1898(明治31)年に東京帝国大学土木工学科を卒業後、内務省に入省し、大阪土木出張所長や東京土木出張所長を歴任して1934(昭和9)年に退官するまで、新淀川の開発や利根川第3期改修など、明治末期から昭和初期にかけての国内諸河川の改修計画の策定や改修事業に係わった。1920(大正9)年に工学博士を取得、1933(昭和8)年には土木学会第21代会長に就任している。主要著書には「日本水制工論」、「内務省直轄土木事業工事略史・沖野博士伝」などがある。没年は1960(昭和35)年で、齢88であった。

2. 眞田秀吉旧蔵資料の性格と資料公開の問題点

眞田秀吉は、前記のように内務省の河川工事現場と計画畑を歩いていた。従って、今回の旧蔵資料も多くが河川関係で占められている。旧蔵資料の全目録は、図書館HPにアップしているので、これを参照したい。但し、旧蔵資料の原本閲覧は原則禁止している。旧蔵資料には、希少性の高い資料が数多くあり、しかも資料形態は多様であるから、各資料の保存性を考えると、そうせざるを得ないが、土木図書館本来の役割を考えると、これらはお蔵入りさせるべきで無いことは理の当然である。むしろ、会員諸氏に対し、積極的に公開し閲覧に供する必要

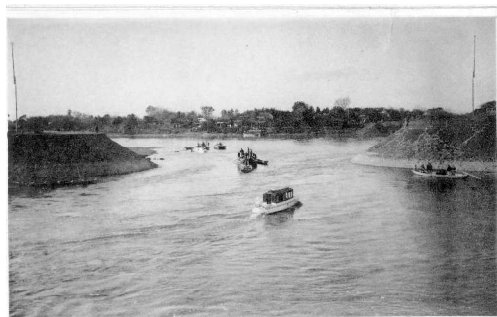


写真-1 眞田資料「関宿棒出し」の絵葉書

がある。しかしながら、資料を公開し閲覧に供するには、幾つかの問題点や課題がある。つまり、眞田秀吉旧蔵資料の最大の特徴、資料形態の多様性に規定された問題である。以下、四つの資料形態を取り上げて、各問題点を検証してみたい。

その一つは90枚を数える土木絵葉書である。写真-1に示す「関宿棒出し」は、「江戸川頭関宿洗堰開門工事」の絵葉書の中の1枚で、1927(昭和2)年に関宿水閘門が建設される以前の江戸川流頭の状態を示す貴重な資料である。すなわち「棒出し」を左右岸から突き出して江戸川流頭を狭窄し、利根川から江戸川へと流れる洪水量が絞られたのである。絵葉書には、これ以外にも土木関係の写真が多数あるが、資料形態は写真をベースにした絵葉書であるから、スキャニングによるデジタル化は容易である。従って、これら絵葉書は、既に図書館HPのデジタルアーカイブスで閲覧可能な状態になっている。

資料の二は報告書の類である。例えば、貴重な資料として岐阜県が1936(昭和11)年に作成した「杭瀬川外四ヶ支川改修計画説明書」がある。木曾川上流改修における揖斐川中流部の右支川群を対象にした改修内容の説明書で、これに計画図が添付されている。図-1に見るのは、揖斐川右3次支川大谷川の計画断面図である。大谷川は、大垣輪中等の制約を受けて、現在も右岸側に洗堰が設置された特殊な河

キーワード 土木資料, デジタルアーカイブス, デジタルライブラリー, 土木仮想博物館, 資料解題
連絡先 〒136-0075 東京都江東区新砂1-9-15 東京都土木技術センター Tel 03-5683-1523

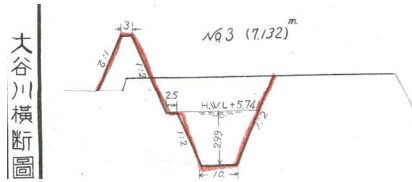


図-1 眞田資料「大谷川改修計画断面図」
(原図コピー版に筆者が朱を加筆)

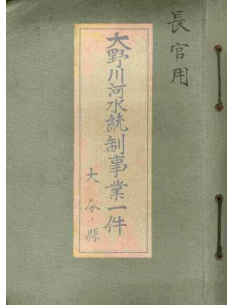


写真-2 眞田資料「大野川河水統制事業申請書」



図-2 眞田資料「利根川放水路図」

川であるが、当該資料は左岸に築堤し、右岸側が無堤の状態に描かれている。つまり、木曾川上流改修にあつて、岐阜県は大谷川右岸を無堤のまま放置しようとして計画していたことが判る。当該資料は、説明書に加えて、こうした図面が添付されているから、これを公開し閲覧に供するには、説明書と図面の双方をデジタル化したり複製を作成する必要がある。

資料の三は、和紙に記載された和綴じの報告書や申請書の類で、写真-2はその一例、1942(昭和17)年2月10日付けで大分県知事灘尾弘吉から内務大臣東条英機に提出された「大野川河水統制事業国庫補助申請書」である。河川総合開発計画に繋がる河水統制事業の内実がここに示されるが、このような和綴じ資料の複製を作成するには、綴じ紐を解いて一枚ずつ複写する等の作業が必要で、しかも複製後は原型に復す必要がある。従って、資料の二よりも複製やデジタル化に手間がかかる資料である。

資料の四は、A0版を含む青焼き図面である。図-2は、その一例、「利根川放水路計画図」である。当

該資料には、利根川右岸の小堀地先から船橋市谷津にかけて利根川放水路の路線が描かれ、船橋周辺には放水路計画に包含された工業地帯の造成地が描かれる。利根川放水路計画の内実を示す貴重な資料であるが、当該資料は入手時点で、既に折り目が付き、これが茶色に変色している。また青図であるから描かれた計画路線等が不鮮明で、全図をデジタル化した場合も図-2のとおり判読が難しい。つまり、複製やデジタル化に難がある資料である。

眞田秀吉旧蔵資料は、以上のように、多様で且つ資料点数も膨大であるので、資料全てを公開し閲覧に供するには、相応の労力と予算の投入が求められるような状態に置かれている。

3. 眞田秀吉旧蔵資料とデジタルライブラリー

ところで、土木図書館の今後進むべき方向性としてデジタルライブラリーがあることは否定できないと考えている。昨今の社会情勢は、IT社会の実現という方向に加速しているし、デジタルライブラリーは、蔵書原本の閲覧の減少に直結して、蔵書の保全という観点からも有効且つ有益である。他方、図書館委員会では現在、土木仮想博物館の構築に向けた検討を行っている。資料点数が多く、多様な資料形態を有した眞田秀吉旧蔵資料は、土木仮想博物館に格好の材料を提供するはずである。

では、眞田旧蔵資料のデジタル化は直ちに可能かと言うと、必ずしもそうではない。何故ならば、眞田資料には前述した資料形態四のように、デジタル化に難がある資料が存在し、またデジタルライブラリーとして公開する場合には一定の条件整備が必要だと考えるからである。例えば、土木図書館の旧蔵資料のなかで、筆者が係わったもう一つの事例として、古市公威旧蔵資料がある。資料の素材は写真であるから、眞田資料の絵葉書と同様、スキャニングによるデジタル化は比較的容易ではあるが、古市資料には解題を付してデジタルアーカイブスで公開している。つまり眞田資料を公開する場合に求められる解題の是非である。従って、眞田旧蔵資料は、コピー紙への複写という閲覧用資料を拙速に作成するよりも、解題の必要性や青図のデジタル化手法、土木仮想博物館の進展状況、さらに土木図書館の今後の動向を見据えた議論を図書館委員会で進めるなかで、公開手法などを決定していきたいと考えている。